

人間はわかりあえるか

—ある文化人類学者の旅—

原ひろ子著

PHP研究所発行

筆者原ひろ子氏は、文化人類学者であり、カナダ北西部に住む狩猟民族へアー・インディアンの研究者としても著名である。本書は過去十年間にいろいろなものに発表された文章を選んで集められたものである。

足かけ三年に亘って生活を共にしたへアー・インディアンの話はさすがに面白く、日本の半分ほどの広さの地域にたった三百人余りが獲物を追ってテント生活をしている様子は、小さな土地や家求めて汲々としている我々の想像の及ぶと

ころではないが、原氏の文章に思わずひきこまれてしまう。今は狭くなったこの同じ地球上に、このように異なった生活をする民族があることを知り、その中でつちかわれている親子観、夫婦観、育児家事に対する考え、宗教や精神生活を知るにおよんで、いかに我々があまりにも小さな考えにとらわれすぎているかに気付かされる思いである。

へアー・インディアンとの共同生活やアメリカ、インドネシアなどでの体験に、学問的洞察を加えて展開する文化論、人間論にも興味がある。女性の生き方に関しては、『自分で自らのおく生活の軸を多様ななかから選びとれる人生』を実現するためには、個人個人が自分で考えるくせや、自分でものごとを感じるといった人間としてあたりまえの習慣

を強く確立してゆかなければ」ならないし、「へアー・インディアンの女性は……現代の日本に生きる私たちに教えてくれるものを持っている」と述べている。

また「世界の女性の生活に関する万華鏡のような多様性は、人類という生物が、可塑性をもっているという事実を示す一つの証拠であると考えますと、万華鏡にさらに彩りを添えてゆくのであろうと楽しみにもなってきました」という言葉は、深く印象に残る。今、ここに生きている我々の生き方も、多様な、広い世界のの一つであり、長い歴史の中の一つであると思うと、興味を持って自分自身をながめられるような気がする。

面白く、手軽に読めるが、多くの示唆を与えられる本である。

(水田順子)